日本語 Japanisch

（日本語 1～10 ページ/ Deutsch Seite 11-18)

1.コース

東京横浜独逸学園の日本語授業には２つのコースがあります。
ひとつは「非母語話者のための日本語」で、もうひとつは「母語話者のための日本語」です。どちらのコースも初等科２年生から始まります。

非母語話者のための日本語

非母語話者のための日本語は、初等科２、３、４年生では週２コマの**必修科目**です。授業は学年別に行われます。
中等科５年生では、週２コマの**自由選択科目**です。
６、７、８、９年生では、週２コマの**自由選択科目**です。６年生から９年生は、学年を越えて、レベル別にクラス分けされます。
高等科１０、１１、１２年生では、週１～２コマの**クラブ（ＡＧ）**です。学年を越えたクラス編成です。

母語話者のための日本語

母語話者のための日本語は、初等科２、３、４年生では週２コマの**自由選択科目**です。２年生から４年生は、学年を越えて、レベル別にクラス分けされます。初回の授業で、グループ分けのため、筆記テストを行います。
中等科５年生では週２コマの**自由選択科目**です。
６年生が始まる前に、第二外国語として、フランス語か日本語のどちらかひとつを選びます。これは、６年生から１２年生まで続く**主要科目**です。週４コマで、成績は進級に関係します。
（６年生からの主要科目の日本語は“第二外国語 zweite Fremdsprache”という名前がついていますが、日本語は、母語話者のための日本語としてアビトゥア科目に認可されています。そのため、このコースのレベルは母語レベルです。）

※上記の授業は、ＡＧ以外通年授業で、一年の途中で参加すること、または辞めることはできません。

Japanisch an der DSTY

	Japanisch für NICHT- Muttersprachler	Japanisch für Muttersprachler
Kl.12		Abitur
Kl.11	AG	↑
Kl.10		↑
Kl.9		↑
Kl.8	Wahlfach Gruppe C	↑
	Wahlfach Gruppe B	
Kl.7	Wahlfach Gruppe A	↑
Kl.6		Hauptfach*
Kl.5	Wahlfach	Wahlfach
Kl.4	Pflichtfach	Wahlfach Gruppe C
Kl.3	Pflichtfach	Wahlfach Gruppe B
Kl.2	Pflichtfach	Wahlfach Gruppe A
Kl.1	——	——
KG	——	——

*６年生からの主要科目としての日本語は“第二外国語 zweite Fremdsprache”という名前がついていますが、レベルは、母語レベルです。

２.参加条件

非母語話者のための日本語

日本語が母語レベルでないこと

母語話者のための日本語

日本語を母語レベルで、日常生活で不自由なく使えること。

初等科：　日本語を母語レベルで、日常生活で不自由なく使えること。
読み書きの能力は条件にありません。

５年生:　日本語を母語レベルで、日常生活で不自由なく使えること。
ひらがなとカタカナを正しく使え、２年生の漢字を正しく読めて書けることがだいたいの目安です。

６年生からの主要科目：
日本語を母語レベルで、日常生活で不自由なく使えること。
ひらがなとカタカナを正しく使え、３年生の漢字を正しく読めて書けること、文章の中で使えることがだいたいの目安です。
参加前に作文形式のテストをします。

３.授業目標・授業内容

非母語話者のための日本語

東京横浜独逸学園の日本語は、ドイツ及びドイツ語圏の生徒が、自分の住んでいる国—この場合、日本—について知り、異文化を受け入れることのできる本当の国際人になることを目標にしています。

そのため、日本語授業では、日常会話、文法、文化、風習、年中行事等を学びます。
中等科・高等科では、希望者は日本語能力検定試験を受けます。

※詳しくは学習要綱 Lehrplan を参照

母語話者のための日本語

　東京横浜独逸学園の日本語は、ドイツ及びドイツ語圏と日本の多文化を持った生徒が、それぞれの文化をよく知り、その両文化を背景に持つ者として、自信を持って生きていけることを目標にしています。

　そのため、日本語授業の内容は、言語能力の向上のみならず、本来他教科の内容である、地理、歴史、宗教、文化、社会等も含まれ、各分野・テーマは、多文化を背景に持つ生徒がその立場をいかせる取り扱い方となっています。

母語話者のための日本語　　初等科及び中等科５年生：

　多文化を背景に持つ生徒にとって、この段階での**基礎固め**が最も大切です。特に**語彙量**を増やすことが重要です。語彙量が多ければ、その後の漢字は積み上げて学習することができます。

　漢字については、その後学習する漢字の基礎となる小学校１、２、３年生の基礎が最も大切です。この４５０字の**少なくとも**８０%が、読み、書きできる実力がつくよう練習しましょう。

※詳しくは学習要綱 Lehrplan を参照

母語話者のための日本語授業の主なテーマ例　2010/11

Kl.12　在日外国人　岡倉天心『茶の本』

Kl.11　森鴎外　壷井栄　宗教　日本国憲法　加藤周一　日本史通史　日本史レポート

Kl.10　芥川龍之介　科学と人間　宗教　日本現代史　職業 敬語 日本近代文学レポート

Kl.9　星野道夫　小泉八雲　国際問題　アジア　日本伝統文化レポート (広島　長崎)

Kl.8　説明文と物語　短歌　詩　伝統文化　報道　社会問題　（宮沢賢治）

Kl.7　説明文と物語　短歌　詩　地理　ニュース　報道

Kl.6　文の種類と構成　物語を作る　部首　慣用句

Kl.２－5　「聞く」「話す」「読む」「書く」の基礎的な力を養う
　　ひらがな、カタカナ、漢字（3 年生の漢字の読み書きが 80%以上できる）
　　日本文化　　年中行事

※詳しくは学習要綱 Lehrplan Grundschule/Lehrplan Sek I/SekII 参照

４.課外活動・遠足

今、自分たちの生きている社会を知るために、日本語授業では例年、一年を通して、多くの課外授業を行っています。

2008/09 年度課外活動例　　課外活動は年度によって内容や対象学年に変更があります。

月	活　動　内　容	対象学年
9 月	熊野神社例大祭 自由が丘　（週末） 獨協高校　文化祭訪問　（週末） サレジオ学院　文化祭訪問　（週末）	Kl.3,4,5 + Familien Kl.10-12 Kl. 9
10 月	お会式 五反田 池上本門寺 鎌倉遠足	AG (Gym) + Familien AG (Gym) + Familien
11 月	（酉の市 新宿　花園神社 ） サレジオ学院訪問 親子ふれあい自然教室　翠陵中学・高校	AG (Gym) + Familien Kl.2 - 5 + Familien
12 月	平安小学校おもちつき訪問 日本語能力試験	Kl.2 Wahlfach Kl.6-9 AG
1 月	もちつき大会　ロータリークラブ	Wahlfach Kl.6-9 AG
2 月	漢字検定試験（金曜日第一休憩＋2 時間目） 民家園	Kl.1－Kl.13 Kl.3
3 月	花見 せせらぎ公園	Wahlfach Kl.5
4 月	裁判所見学	Kl.11-12
5 月	下町風俗資料館（相撲観戦）	Kl. 6 Wahlfach Kl.6
6 月	日生劇場 歌舞伎／能鑑賞	Wahlfach Kl.5 Kl.9-10

その他の活動例

－中川先生書道教室訪問　AG
－図書館見学　Kl.6-7
－国立科学博物館 （「恐竜」、「大陸移動」の教科書内容補充）　Kl.6 Kl.7
－東京大空襲展 Kl.7 Kl.8
－民家園センター北 （いろり端むかしばなし聞き）GS JaM C グループ
－歌舞伎 、狂言 Kl.5　　等

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災以降、日本語を履修している生徒も、していない生徒も様々な被災地支援活動を行いました。　（下：街頭募金・写真洗浄ボランティア）

５.母語話者のための日本語を勉強した／している生徒の作品

東京横浜独逸学園の母語話者のための日本語を学んだ／学んでいる生徒の作品の一部です。ドイツ及びドイツ語圏と日本という多文化を背景に持つ生徒達の成長、日本語力、思考力、授業内容への理解を深めるため、ご参照ください。
（ドイツ語バージョンでは、Jahrbuch 2004 の記事が載っています。）

５年生　2011/12 年度

プニョプニョとプクプク

ブリンクマン　マリオ

ぼくは二十五日の火曜日に、自然科学の宿題をしました。リー先生の自然科学の授業は、毎回色々な実験をするので大変おもしろいです。

今回、家で実験をするのは、グミと豆の変化についてです。そのために、ぼくたちはリー先生からグミをもらいました。グミをどうするかというと、ちいさなコップに五ミリリッターの水を入れて、その中にグミを入れます。そして一時間ごとにグミが何グラムかを測るのです。それを五時間しなければなりません。

水に入れる前のグミは三グラム、そして一時間後も三グラム、思ったとおり五時間後も三グラムでした。

次の実験は、同じことを豆でするというものです。そのために、お母さんは黒豆を買ってきてくれました。しかし、一つぶが一グラムもなかったので六つぶ入れてやっと二グラムにしました。

一時間たつまで、ぼくは本を読んでいました。そして一時間たつと、豆は全部合わせて六グラムになりました。その一時間後は七グラムです。これはとてもおもしろくて、実験が終わると、ぼくは水をふやしました。その夜は九グラム、次の日は十、そして今日、十月二十七日木曜日は十一グラムでした。

この実験からわかったことは、グミは水にとけることも、きゅうしゅうすることもないということでした。その反対に豆はとてもたくさんの水を吸収します。
この実験はとても楽しいので、今も続けています。

９年生　2011/12 年度

映画『ナージャの村』を見て考えたこと　　クラッククラウアー　英里香

私はこの映画を福島で起きた原発事故と重ね合わせて見てしまいました。
ナージャが住むドージチ村は、ここから遠いベラルーシにあるのではなく、今、私達の住む日本の福島県にあるという事実が、この映画を見終わった後も、ずっと心に重くのしかかってきました。
テレビのニュースや報道番組を見ていると、放射能汚染によって自分たちの住んでいた村や町に帰れなくなった人たちがたくさんいることがわかります。
先日、その立ち入り禁止区域に一時帰宅を許された家族の二時間リポートをテレビで見ました。この家族は、肉牛を飼っていましたが、避難する時に、すぐに帰宅できるだろうと思って、牛たちを牛舎に置いたままにしていました。一時帰宅した家族が一番先に駆けつけたのがその牛舎でした。そして、そこで見つけたのは、飢えて骨と皮だけになって死んでいた牛たちの姿でした。その家族は、皆泣いていました。そして、自分たちを責めていました。肉牛となる牛にこれだけの愛情をかけていた人達は、牛を無駄に死なせてしまったことを心からすまないと言って、祈っていました。
私はこの場面を見て、急に腹が立ちました。それは、原発を進めた人たちに対して、そしてそれを許してきた私達日本人に対して、いや、世界に対してかもしれません。
原発でできた電気を使って生活していた私達の関心は、これから先、電気が思い切り使えるのか、それとも我慢しないといけないのか、ということに寄せられていき、故郷から追い出される人たちのことを思う気持ちは、だんだん薄れていくでしょう。
家族が一緒に暮らし、安全なものを食べて、外で運動したり、思い切り深呼吸できること、こんな普通のことができることが、本当の幸せなのだと思います。
ナージャや福島の人たちの悲しみと怒りを私達は自分のこととして受けとめなくてはいけないと思います。

映画『ナージャの村』‥監督：本橋成一氏　チェルノブイリ原子力発電所事故によって汚染された
ベラルーシの村に住む人々の暮らしを描いた作品

１０年生　2010/11 年度

作用・反作用の発見

アリス　クロル

私は、物理の授業で、あることに気付きました。

それは、ドイツ語で actio=reactio と言います。日本語では、作用反作用の法則と訳されます。これは、英国の物理学者、天文学者、数学者である、アイザック・ニュートンが発見しました。ニュートンには、運動の法則の他に、万有引力の法則の発見、微分積分学の発見、されに、光のスペクトル分析など、様々な業績があります。作用反作用の法則は、運動の法則の第三法則です。第一法則は慣性の法則、第二法則はニュートンの運動法則です。

作用反作用の法則は、「物体が他の物体に力を及ぼすとき、他の物体から、おなじ大きさの逆向きの力を受ける」というように説明されています。つまり、力というものは、必ず、対になって作用するということです。すべての運動には、おなじ大きさの反対向きの力が働いており、引っ張ると引っ張り返され、押すと押し返されます。

私は、この法則が物理だけでなく、人生においてもその通りだということに気がつきました。

「失敗は成功のもと」ということわざをよく聞きます。これは、失敗したら、その原因を反省し、方法や欠点を改めることで、成功につながるという意味です。つまり、失敗という「運動」をしたら、成功という「運動」が返ってくるということです。これは、ニュートンの作用反作用と同じです。

また、仏教でいう、因果応報や報いも、その法則と同じです。善い行いをすれば善いことが返ってくる、そして、悪い行いをすれば必ず悪いことが返ってくると考えられています。

されに、日常生活にも、ニュートンの法則と同じような運動が見られます。例えば、重い病気にかかり、とても辛く苦しい思いをした子供は、病気にならなければわからなかった命の大切さに気付くかもしれません。たとえば、その子供は自分の気が付かなかった素晴らしい才能に気付くかもしれません。他には、辛い日々を乗り越え、病気が治ることもあります。そうすると、「辛いことは乗り越えられるもの。」と考えられる人になるでしょう。

ニュートンは、このような、人生における物事を元にして、作用反作用の法則を発見したのではないでしょうか。そう思ってしまうほど、私は人生での出来事と作用反作用にはつながりがあると感じました。

私はこうして新たな発見をしたのです。他にも、数学や理科、もちろん物理でも、このような発見をすれば思ってもみなかったつながりや、この世界はとても不思議だと思えることがあるかもしれません。

１３年生　2005/06 年度

日本語の授業をふり返って

鈴木　裕希

五月になって、ドイツ学園での学校生活があと数週間で幕を閉じようとしています。日本語の授業もあと数回で終わってしまいます。いままでのドイツ学園での日本語の授業が、自分にとってどのような意味をもっているのか、これから説明したいと思います。そのためには、今までの自分の人生を振り返る必要があると思います。

僕は小学校５年生の時に日本に帰国しました。僕は日本語で話すのも、また読み書きも苦手でした。それに、日本がどのような国なのかも、よく知りませんでした。つまり、ドイツ育ちの日本人として本来の自分のアイデンティーを持っていなかったのです。しかし、ただ日本に住んで、ドイツ学園でドイツの教育を受けても、日本については学べません。そこで、日本語という授業は、僕にとって、とても大切な「役目」を果たしてくれたのです。それは、中学校の漢字、地理や歴史の勉強だけでなく、高校時代の「武士道」や日本人の品格、芸術の勉強もそうです。特に僕にとって大切だったのは、「武士道」と日本人の自然観についての授業です。なぜならば、僕が昔から日本人の行動様式や考え方に疑問に思っていたものが、この授業によってなくなったからです。

また、こういった日本人の道徳観を客観的に理解するだけではなく、今となっては、自分が社会に出る時に欠かせない知識を身につけられたと思います。

しかし、これよりも大事なのは、僕自身が「もうひとつの自分」について勉強できたことです。僕はドイツで少年時代をすごしていたため、日本人としての自分を考える機会がありませんでした。このような状態で帰国したため、自分と社会の間には壁があり、また、自分のアイデンティティーもはっきりしていませんでした。8 年過ぎた今は、僕は多文化で育った人間としてどう生きていくべきか少しずつわかってきたと思います。

これから、僕はドイツの大学で勉強するつもりですが、必ず、日本語の授業で得た知識が必要になると思います。たとえば、外の人に日本人や日本文化について問われることが考えられます。そのような場合に日本語で学んだことが応用できると思います。また、多文化で育った自分が日本とドイツの強い絆をどう支えていけばいいのか、問われるときが来ると思います。また、現在、他の国の文化に否定的になっており、歴史が繰り返されようとしています。そこで、多文化で育った人間として、僕は何をするべきなのか、ということも問われます。日本語の授業では、日本についてだけ習ったのではありません。日本と外国の関係や、外国が日本にどのような影響を与えたのか、ということについても学びました。そこで、日本が昔、差別的な目で見られたり、日本文化が理解されなかったことも勉強しました。つまり、日本語によって、国々の関係のあり方を知り、また、政治の動きを正しく見る能力を身に付けられました。また、一つの問題を一つの方向からだけではなく、他の方向から見てみることは、人と人や国と国の間の理解につながる、ということも学びました。

世界は今、「グローバリゼーション」に取り囲まれています。つまり、世界中の人が交わり、交流しています。しかし、同時に、人々はこの「多文化」という流れに乗れず、外国や自分の知らない文化に閉鎖的になっています。日本語の授業は僕に、このような動きを認める能力を与えてくれたほか、自分が他の文化をそのまま受け入れなくてはならない、ということを教えてくれました。

６. 卒業生

東京横浜独逸学園の**日本語を履修した生徒の８０～９０％**は、卒業後、主に**ドイツ語圏の教育機関**に進んでいます。一方、ドイツのアビトゥアは、日本でも高校卒業資格として認定されているので、日本の教育機関に進む生徒も毎年、若干名います。その場合、**ほとんどが、外国人及び帰国子女枠を設けている大学で、専攻学部・学科は限られています。**

現在までに、独逸学園の卒業生が進んだ主な大学は、早稲田大学、上智大学、国際基督教大学（ＩＣＵ）です。以下、ここ数年の、日本の大学・専門学校に進んだ卒業生の進路例です。

2011 年卒業	立教大学	一名				
2010 年卒業	早稲田大学	二名	東京外国語大学	一名		
2009 年卒業	早稲田大学	一名				
2008 年卒業	なし					
2007 年卒業	早稲田大学	一名	上智大学	一名	専修大学	一名
2006 年卒業	早稲田大学	一名				
2005 年卒業	上智大学	二名	ＩＣＵ	一名		
2004 年卒業	早稲田大学	一名				
2003 年卒業	ＩＣＵ	一名	東北大学（ドイツの大学から留学）	一名		
2002 年卒業	ＩＣＵ	二名				
2001 年卒業	東京農大	一名	東京基督教大学	一名		

Japanisch

1.Kurse

An der Deutschen Schule Tokyo Yokohama werden **zwei** Japanisch-Kurse angeboten. Einer ist Japanisch für Nicht-Muttersprachler, der andere für Muttersprachler. Die beiden Kurse werden ab Kl.2 angeboten.

Japanisch für Nicht-Muttersprachler

Japanisch für Nicht-Muttersprachler ist **Pflichtunterricht** in der Kl.2, 3 und 4. Dieser Unterricht wird zwei Stunden pro Woche unterrichtet und nicht klassenübergreifend.
In Kl.5 wird dieser Unterricht als **Wahlfach** angeboten und zwei Stunden pro Woche ebenso nicht klassenübergreifend unterrichtet.
In den Kl. 6 bis 9 wird dieser Unterricht als **Wahlfach** angeboten und klassenübergreifend zwei Stunden pro Woche unterrichtet.
In der Oberstufe wird Japanisch als **AG** angeboten und klassenübergreifend eine oder zwei Stunden pro Woche angeboten.
siehe.S.12

Japanisch für Muttersprachler

Japanisch für Muttersprachler wird in der Kl.2, 3 und 4 als **Wahlfach** angeboten und zwei Stunden pro Woche unterrichtet. Die Schüler werden je nach Niveau in drei Gruppen aufgeteilt. In der ersten Stunde schreiben die Teilnehmer einen Aufnahmetest.
In Kl.5 wird dieser Unterricht als **Wahlfach** angeboten und nicht klassenübergreifend zwei Stunde pro Woche Unterrichtet.
Am Ende der Kl.5 müssen die Gymnasialschüler als zweite Fremdsprache entweder Französisch oder Japanisch wählen. Da dieser Unterricht ein **Hauptfach** ist, ist er versetzungsrelevant. Die Hauptschüler und die Realschüler können zwischen Wirtschaft, Französisch und Japanisch wählen.
siehe.S.12

*In Kl. 6 heißt das Hauptfach Japanisch zwar „zweite Fremdsprache“, wird aber auf Muttersprachenniveau unterrichtet, weil es so von dem deutschen Behörden als Abiturfach anerkannt wird.
** Die obengenannten Unterrichte außer AG werden ganzjährig unterrichtet. Während des Schuljahres können sich die Schüler weder an- noch abmelden. (außer bei Schulwechseln)

Japanisch an der DSTY

Japanisch für NICHT- Muttersprachler			Japanisch für Muttersprachler	
Kl.12			Abitur	
Kl.11	AG		↑	
Kl.10			↑	
Kl.9			↑	
Kl.8		C	↑	
	Wahlfach Gruppe	B		
Kl.7		A	↑	
Kl.6			Hauptfach*	
Kl.5	Wahlfach		Wahlfach	
Kl.4	Pflichtfach			C
Kl.3	Pflichtfach		Wahlfach Gruppe	B
				A
Kl.2	Pflichtfach			
Kl.1	——		——	
KG	——		——	

*In Kl. 6 heißt das Hauptfach Japanisch zwar „zweite Fremdsprache“, wird aber auf Muttersprachenniveau unterrichtet, weil es so von den deutschen Behörden als Abiturfach anerkannt wird.

2 .Teilnahmebedingungen

Japanisch für Nicht-Muttersprachler
Die Schüler/ die Schülerin beherrscht Japanisch nicht auf muttersprachlichem Niveau.

Japanisch für Muttersprachler
Die Schüler/ die Schülerin beherrscht Japanisch auf muttersprachlichem Niveau.

Wahlfach in der Grundschule：

- Die Schüler/ die Schülerin beherrscht Japanisch auf muttersprachlichem Niveau. Lese-und Schreibkentnisse sind keine Bedingung für die Teilnehmer.

Wahlfach in der Kl.5：

- Die Schüler/ die Schülerin beherrscht Japanisch auf muttersprachlichem Niveau.
- Die Schüler/ die Schülerin benutzt Hiragana und Katakana im ganzen Sätzen und beherrscht die Kanji der Kl.2 im Lesn und Schreiben.

Hauptfach Japanisch ab Kl.6：

- Die Schüler/ die Schülerin beherrscht Japanisch auf muttersprachlichem Niveau.
- Die Schüler/ die Schülerin benutzt Hiragana und Katakana im ganzen Sätzen und beherrscht die Kanji der Kl.3 im Lesn und Schreiben.
- Zu Teilmahme ist das Bestehen des Aufnahmetests (Aufsatz) notwendig. teilnehmen.

3 . Lernziel und Lerninhalt

Japanisch für Nicht-Muttersprachler
Das wichtigste Ziel des Japanischunterrichts für Nicht-Muttersprachler an der DSTY ist das Gastland Japan kennen zu lernen und Verständnis und Toleranz gegenüber der fremden Kultur zu lernen, so dass die Schüler zu Brückenbauern zwischen Japan und ihren Heimatländern werden und sich später selbstbewusst und aufgeschlossen in einem internationalen Umfeld bewegen können.
Dafür werden Alltagssprache, Grammatik, Kultur, japanische Besonderheiten, sowie Feste unterrichtet.
Im Sek I und II können die Schüler je nach Bedarf Japanese Proficiency Test (Nihongo Nouryoku Shiken) ablegen. siehe.Lerplan

Japanisch für Muttersprachler

Das Ziel des Japanischunterrichts für Muttersprachler an der DSTY ist, Schüler mit deutschem und japanischem Hintergrund beide Kulturen gut verstehen zu lassen und als Quelle ihrer bikulturellen/multikulturellen Identität anzunehmen. Es ist uns wichtig, unser Schüler zu selbstbewussten und zufrieden Menschen mit dem Hintergrund zweier Kulturen zu erziehen. Um dieses Ziel zu erreichen werden in diesem Kurs nicht nur Japanisch als Sprache, sondern auch Geographie, Geschichte, Religion, Kultur, Sozialkunde Japans unterrichtet. Dabei werden alle Aspekte an den Sichtweisen beider Länder behandelt.

Japanisch für Muttersprachler - Wahlfach in der Grundschule und in der Kl.5- :

In dieser Phase sind die Grundlagen in dieser Phase das Wichtigste. Besonders die Erweiterung des **Wortschatzes** ist für die spätere Entwicklung im Japanischen entscheidend. Mit einem großen Wortschatze sind auch die Kanji relativ leicht zu lernen.
Die in der Kl.1, 2, und 3 gelernten Kanji sind die Grundsteine für alle späteren restlichen Kanji. Das Ziel des Kanjilernens in einer Phase soll sein, **mindestens** 80% von diesen 450 Kanji zu lesen und zu **schreiben** zu lernen.

siehe.Lerplan Grundschule/Lehrplan Sek I/SekII

Beispiele für die Hauptthemen in Japanisch für Muttersprachler 2010/11

Kl.12 Ausländer in Japan, „Das Buch vom Tee“ Tenshin Okakura

Kl.11 Ogai Mori, Sakae Tsumoi, Religion, japanische Verfassung, Shuichi Kato, Japanische Geschichte von Joomon bis Heisei

Kl.10 Japanische Literaturen nach Meiji, Ryunosuke Akutagawa, Religion, Beruf, Keigo, Technologie und Menschen, Japanische Geschichte von Meiji bis Heisei

Kl.9 Michio Hoshino, Yakumo Koizumi, Japanische traditionelle Kulturen, Asien und Japan nach Meiji, Norden-Südenproblem, (Hiroshima und Nagasaki)

Kl.8 Kenji Miyazawa, Erklärung und Erzählung, Tanka, Haiku, Gedicht, traditionelle japanische Kultur, Medien, aktuelle Nachrichten

Kl.7 japanische Erdkunde, Medien, Nachrichten, Erklärung und Erzählung, Tanka, Haiku, Gedicht,

Kl.6 verschiedene Arten von Sätzen, Märchen, Radikal (Bushu), Sprichwörter

Kl. 2 - 5 Grundlage “verstehen“ “sprechen“ “lesen“ “schreiben “
Hiragana, Katakana und Kanji (80% von Kanjis der Kl.3 lesen und schreiben)
Jahresfeste Kultur

siehe. Lehrplan Grundschule/Lehrplan Sek I/Sek II

４. Aktivitäten im Bereich Japanisch an der DSTY

Im Bereich Japanisch an der DSTY werden das ganze Jahr hindurch zahlreiche Ausflüge, Austauschprogramme, Aktivitäten usw. angeboten.

Aktivitäten in 2008/09

Monate	Aktivitäten	Klasse / Gruppe
September	1. Schreinfest in Jiyugaoka (Sam. & Son.) 2. Besuch Schulfest bei Dokkyo Highschool (Sam.) 3. Besuch Schulfest bei Salesio Highschool (Sam.)	Kl.3,4 und 5 + Familien Kl.10－12 Kl.9
Oktober	4. O-eshiki Tempelfest in Gotanda (Sam.) 5. Ausflug nach Kamakura (Sam.)	AG (Gym) + Familien AG (Gym)
November	(4.oder Tori no itchi-Schreinfest in Shinjuku) 7. Besuch der Salesio Highschool (Sam.)	(AG + Familien) Kl.9
Dezember	[Besuch der Heian Grundschule] 8. Japanese Proficiency Test	Kl.2 Kl.6－13
Januar	9. Mochifest mit Rotary Club [Besuch Chigasakidai Grundschule]	Wahlfach im Gym + AG Kl.2
Februar	10. Kanji-Prüfung 11. Puppenfest Besuch Minkaen in Center Kita	Kl.1－13 Kl.3
März	12. Salesio Highschool 13. Kirschblütenfest in Seseragi-Park	Kl.9 Kl.5
April	14. Landgerichtbesuch	Kl.11－12
Mai	15. japanisches Kulturmuseum (15. oder Besuch Sumokampf)	Kl. 6 Wahlfach und Kl.6
Juni	16. Musical in Nissei-Theater 17. Kabuki-Theater	Kl.5 Kl.9 und 10

Sonstige Aktivitäten

－Kalligraphie bei Frau Nakagawa	AG
－Volksmärchen Vorlesungen im Volksmuseum in Center Kita	Kl.3-4
－Besuch der Bibliothek in Tsuzuki	Kl.6 oder Kl.7
－National Sience Museum in Ueno	Kl.6 oder Kl.7
－alte Japanischen Häuser Nihon Minkaen in Mukoogaokayuuen	Wahalfach Jap.
－Besuch der TV-Sendung	Kl.8
－Besuch Museum Luftangriff in Tokyo in 1945	Kl.7 oder Kl.8
－No/Kyogen Theater	Kl.9 oder Kl.10
－Edo Museum in Ryogoku oder Ukiyoe Museum in Shibuya	Kl.11 oder Kl.12

5 .Eindrücke der Schüler über Japanischunterricht an der DSTY

Kl.9 Kyogen

Im Jahrbuch 2004 sind die Eindrücke der Schüler über Japanischunterricht.

Japanischunterricht

Kl.13 Nana Behrend

Ich nehme seit dem 5. Schuljahr am Japanischunterricht der DSTY teil. Dort wurden mir grundlegende japanisch Kenntnisse, wie zum Beispiel der korrekte Aufbau eines Aufsatzes, das Lernen von Kanjis und die japanische Geschichte, mitunter das Verhältnis zu Korea usw. vermittelt. Dieses sind wichtige Kriterien um eine gute Basis zur Weiterentwicklung der japanischen Sprache zu besitzen, doch schätze ich andere Dinge, die mir im Unterricht mitgegeben worden sind, noch mehr.

In der Mittelstufe nehmen viele Halbjapaner/innen am Japanischunterricht teil und somit ist der Unterricht dem entsprechend niveauvoll und Interesse sowie den Bedürfnissen der Schüler angepasst

Unsere tägliche Umgebung in der wir leben ist hauptsächlich deutsch geprägt und wir bekommen viele Gelegenheiten etwas über Deutschland und über die deutsche Sprache zu erfahren. Hingegen dazu haben wir sehr wenig Kontakt zur japanischen Außenwelt und zur Umgebung und damit kaum Kontakt zu Japanern. Die Chance ist für uns somit gering, etwas auf höherem Niveau über Japan zu lernen. Jedoch wird uns diese innerhalb des Japanischunterrichts gegeben, ich bin froh darüber, diese Gelegenheit wahrgenommen und genutzt zu haben. Dieses trug wesentlich dazu bei, dass ich Japan und dessen Kultur näher kennen lernte. Der Schwerpunkt im Unterricht ist also darauf ausgerichtet, uns Halbjapanern unser zweites Mutterland näher zu bringen und uns über die japanische Kultur und Mentalität aufzuklären. Mir persönlich hat das Buch „Bushido“, das wir als Lektüre im Unterricht behandelten, hinsichtlich dieser Gesichtspunkte sehr weitgeholfen. Es erklärt und stellt die Handlungs- und Betrachtungsweise der Japaner in Hinblick auf ihre Geschichte gut verständlich dar.

Im Japanischunterricht wurden auch oft aktuelle Nachrichten, wie zum Beispiel der Irakkonflikt oder allgemein die Politik in Japan, Deutschland oder Amerika diskutiert und debattiert, um unser Blickfeld zu erweitern und uns das internationale und globale Denken als deutsch/japanisch Bilinguale beizubringen. Der Japanischunterricht in der Mittelstufe, ist eine gute Gelegenheit für Japanischsprechende, Dinge über Japan und indirekt über sich selbst zu entdecken und zu erlernen.

Japanischunterricht

Kl.13 Katharina Triebel

An dieser Schule wird Japanisch als zweite Fremdsprache angeboten. Dies gibt vor allem Halbjapanern die Möglichkeit, an einer deutschen Schule ihr Japanisch zu verbessern und mehr über die Geschichte, Kultur, Religion und Literatur ihrer zweiten Heimat zu lernen.

Als Ganzdeutsche war es für mich immer eine besondere Herausforderung am Japanischunterricht teilzunehmen. Zwar bin ich hier in Japan aufgewachsen und spreche daher fließend Japanisch, jedoch ist Japanisch eben einfach nicht meine Muttersprache und mein Wortschatz und „Kanjischatz“ daher kleiner als der meiner Mitschüler. Rückblickend kann ich jedoch sagen, dass es sich für mich wirklich geloht hat, Japanisch zu belegen, nicht nur weil sich mein Japanisch dadurch verbessert hat.

Im Mittelpunkt des Japanischunterrichts steht die japanische Mentalität, wie sie beispielweise durch Geschichte und Geographie geprägt wurde. Manchmal frage ich mich, warum das Konzept des „melting pots“ in Japan so ganz und gar nicht funktioniert. Der Japanischunterricht bietet die Möglichkeit solchen Fragen auf den Grund zu gehen. Von seinen geographischen Gegebenheiten ist Japan als Inselland mit vielen Gebirgen auf natürliche Weise isoliert. Daher tendieren Japaner dazu Neuem gegenüber skeptisch und verschlossen zu sein. Mit der Isolation Japans gegenüber dem Ausland während der Edo-Periode entwickelte Japan seine eigene Kultur. Grundlage japanischer Denkweisen und Verhaltensmuster ist auch heute noch das typisch japanische Ideal des Samurai, welches maßgeblich vom Feudalismus jener Zeit geprägt wurde. Als wesentlicher Ausländer bekommt man in Japan oft „Rei“ die Tugend der Höflichkeit und Freundlichkeit entgegengebracht. Nicht nur, dass solcherlei japanische Tugend faszinieren –man sollte wissen, wie man auf Freundlichkeit adäquat reagiert, und sich als Deutscher von dieser Tugend eine Scheibe abschneiden. All dies sind Inhalte des Japanischunterrichts.

Da ich den meisten Teil meines Lebens als Deutsche in Japan verbracht habe, finde ich es sehr wichtig und interessant über die Kultur und Mentalität meines Gastlandes mehr zu erfahren. Ich bin froh, dass unser Schule diese besondere Möglichkeit anbietet.

6 .ehemalige Abiturienten

Nach dem Abitur gehen **80 bis 90% der Schüler, die Japanisch an der DSTY belegt hatten, an die Universitäten oder Fachhochschulen der deutschsprachlichen Länder**. Da das Abitur in Japan anerkannt ist, gibt es aber jedes Jahr einige Abiturienten, die zu japanischen Hochschulen gehen. Dabei werden die meisten auf Plätze zugelassen, die an bestimmten Universitäten für Ausländer oder Heimkehrer vorbehalten sind. Die Fächerauswahl ist deshalb begrenzt. Die meisten ehemaligen Abiturienten sind an die Waseda Universität, die Sophia Universität und die ICU gegangen.

Unsere ehemaligen Abiturienten sind in den letzten 10 Jahren an die folgenden Universitäten gegangen.

2011	Rikkyo University	1 Person
2010	Waseda University	2 Personen
	Tokyo University of Foreign Studies	1 Person
2009	Waseda University	1 Person
2008	-	
2007	Waseda University	1 Person
	Sophia University	1 Person
	Senshuu University	1 Person
2006	Waseda University	1 Person
2005	Sophia University	2 Personen
	ICU	1 Person
2004	Waseda University	1 Person
2003	ICU	1 Person
	Tohoku University（Austauschschüler）	1 Person
2002	ICU	2 Personen
2001	Tokyo University of Agriculture	1 Person
	Tokyo Christian University	1 Person